

高度情報化社会のなかでORは

私は以前から、企業の情報システムが企業経営の強力な戦略ツールであると認識していた。ここ2~3年、INS、ニューメディア、OA、FA、HAなどを活用した高度情報化社会の展望が新聞や雑誌に紹介されているが、まさに、情報システムの使い方の巧拙が、企業の命運をにぎりかねない状況になってきている。一方、ORの適用の1つの狙いがマネジメント・デシジョン・サポート・システムであるとするならば、高度情報化社会のなかでは、情報システムと統合された形で、ORがトップの意思決定のサポートや現場での直接戦力となっていく利用形態が、増加していくものと考えている。

1. スピードとセンシティブィティ

現在の不透明な経済環境下で、事業運営を巧みに行なうには、環境変化を敏感にとらえるアンテナ（センシティブィティ）と迅速な対応（スピード）が必要であると考えている。厳しい企業競争を打ち勝つてゆくには、顕在化した変化を見るだけでは遅れをとることは必至であり、潜在している変化をできるかぎり早く感じとり、それへの対応策を速やかに図り、実施することが大事で、まさに“先手必勝”態勢が要求される。このため、企業のインテリジェンス・システムとして、データ・ベースにどんな情報を収容してゆくかは、重大なことである。当社でも、数値データに関しては、100万系列におよぶ社内外情報（国内外経済情報、業界情報、顧客情報、社内生産・販売・在庫情報など）を保有し、一般使用者が簡単な指示で、検索し、加工し、グラフ化できるオンライン・リアルタイム・システムを稼働させ、センシティブィティに磨きをかけるべく、各種の分析ができるようなツールを提供している。さらに、非数値情報のデータ・ベースとして、光ディスクと新しいワーク・ステーションを活用したツールも提供すべく推進中である。

一方、迅速な対応（スピード）のためには、たとえば、営業の第一線では、これら中央のデータ・ベースの情報に、今日足で集めた生のデータを加味して、明日の営業戦略に直結するようなきめ細かく、個性的な意思決定のための情報システムが必要となる。分散処理装置やパソコンの利用がエンド・ユーザーに広く受け入れられているのも、このような事情を反映したものであろう。これら

東京芝浦電気
情報システム事業本部長

あもう こうへい
天羽 浩平



の機器のソフトに体现された意思決定支援システム活用が日常化したOR利用の時代が、すぐ目の前にきている。

2. ORと情報システムの統合

企業の神経系統ともいえる情報システムは、オンライン化をエンジンとして、企業内から異企業間や小売店、家庭、海外にまでその輪を広げようとしている。この神経系統から流れてくるシグナルの的確な反応をするためには、ネットワークの末端、中間、トップ用に分散配置されたコンピュータ群でのシグナルを解析し、行動指針へ変換する処理機構（ブレン、パワー）が必要となり、ORに期待される分野でもある。企業経営にとっては、頭脳としてのORと神経系統としての情報システムは、まさに、インテリジェンス・システムという車の両輪になり、両者がバランスよく発展、結合してゆくことが、重要である。人間との対話をより重視したORの発展を可能とする情報システムは近時充実してきているので、フレンドリーなORの適用がいろいろな分野で拡大、発展することを期待している。

3. 生活の“チェ”化

さて、現実にもどって、今現在、私のまわりの人がORの手法を活用しているか考えると、2つの見方があると思っている。1つの見方は、ORのむずかしい理論はあまりに理論的で、実務を担当しているものにはよくわからないため使用していないということ。もう1つの見方は、すでに実務の中に組み込まれていて、活用している本人も“ORだ”との意識のないまま使っていて、あたかも、生活の“チェ”となってしまっているということである。ORの各種手法や考え方が企業内で定着したと言えるのは、まさに使う人にとってそれらが“ORだ”と意識せずに、空気のようにORを活用する状況であると思う。

4. おわりに

高度情報化社会を迎えるに当たって、情報システムの発展とともに、ORの役割がさらに企業経営の大きな柱となってゆくことを期待したい。